

出版稲門会



◎巻頭言：スポーツ×出版×早稲田 オグマナオト（1頁）
 ◎寄稿：加藤裕樹／佐藤航／小野信也／讃井裕二（2-3頁）
 ◎学而時習之：赤ちゃんと絵本をひらいたら 白井哲（4頁）

●発行 出版稲門会 〒110-0016 東京都台東区台東2-24-10
 株新星出版社 内 電話 03-3831-0743
 ●発行人：筑紫恒男 ●編集人：富永靖弘
 ●020号 2025年10月1日発行 題字：服部敏幸

声優、ダンサー、漫画家、弁護士、映画監督、気象予報士、脚本家、芸人、恐竜研究者、芥川賞作家、ボイストレーナー、ボクシング世界王者……。早稲田大学の学生向け広報マガジン『早稲田ウィークリー』には、各界で活躍する卒業生の「学生時代とその後」を訊く「先輩に乾杯！」というコーナーがある。私が取材・執筆を担当するようになってもう10年近くが経つが、その間に取材させてもらった校友のほんの一部が冒頭のラインナップだ。

ある取材対象者が「フリーターから総理大臣まで輩出するのが早稲田の魅力」と語っていたのはまさにその通りで、学生に向けて「こんな生き方もある」と提示することが当コーナーの狙いのひとつ。学生当時から夢を貫いてその職に就いた人もいれば、さまざまな出会いと縁によって想定もしなかった道で第一人者になった人まで、まさに千差万別。登る山は違えども、それぞれのジャンルでパイオニアになった人物たちが頂上から見る光景には共通項も多く、学生だけでなく卒

業生にとつても大いに参考になる企画ではないかと自負している。

同様に、「早稲田発のパイオニア」の多さで顕著なジャンルといえば「スポーツ」だ。日本のスポーツシーンにおけるさまざまな「元祖」や「第1号」を調べると、競技を問わず、至るところで「早稲田」

の早稲田スポーツの歴史と魅力を改めて伝えるべく、『早稲田とスポーツ、覇者の150年』を上梓した。本書では早稲田大学が創設された1882年から連なる「早稲田とスポーツの重要トピックス」というべき125のエピソードについて、競技を横断しながら辿っていくことを狙いと

スポーツ×出版×早稲田



オグマナオト

の文字に出逢うことができ

る。各競技の「〇〇の父」「□□の祖」と呼ばれる人物にこれほど早稲田出身者が多いのか、と驚く一方で、その事実は早稲田大学の現役学生だけでなく、卒業生にもあまり周知できていないように常々感じていた。

そこで今春、憎越ながらこ

している。

この『早稲田とスポーツ』をまとめる過程で発見したのは、「出版」と「スポーツ」にも深い関係性があり、そのキーマンとして多くの早稲田人が活躍してきたことだ。たとえば、庭球部発足に関わったひとり、「稲門」という言葉を作った水谷竹紫は、野球

部初代部長である安部磯雄を主幹に据え、日本のスポーツメディアの草分け的存在といえる雑誌『運動世界』を創刊している。



日経ナショナルジオグラフィック 発行

同様に、登山愛好家に欠かせない雑誌『山と溪谷』を創刊したのは、早稲田大学山岳部出身の川崎吉蔵。このほかにも、競馬を愛した劇作家の寺山修司（教育学部中退）が残した全7巻の競馬エッセイシリーズによって、公営ギャンブルだった競馬はファン層を拡大。寺山のエッセイが「競馬をギャンブルから文化に引き上げた」と言われている。

ここで紹介した事例以外にも、スポーツを愛する文筆家、編集者、出版関係者は実に多い。今も昔も出版界を盛り上げる早稲田人が多いからこそ、今後も「スポーツ×出版×早稲田」の魅力的な関係性は続いていくのではないだろうか。

（構成作家ライター・平江三文

子どもたちに 希望と勇気を！



加藤裕樹

忘れられない電話の会話がある。緊張と高揚で震えながら電話のプッシュボタンで番号を入力した。そして——「受験番号〇〇〇〇番の方は……(3秒くらい間があいて)……おめでとーございませう、合格です」。そう言ってくれた相手は、入試の合格

発表ガイダンスサービスの収録された声だ。もちろん自動音声、返事がくるわけではない。それでも「やった、ありがとうございませう！」としつかり声を張って会話してしまったことを覚えていた。これで東京に行ける、早稲田に行けると大きな期待に胸が高鳴った。

まわりの友人たちが一人また一人と、人生を設計し、やりたいうことやるべきことを具現化しはじめの中で、自分はまだ将来の夢というものが定まっていなかった。「なぜ大学に行くのですか？」という受験生向けアンケートでの定番の質問に対し「まわりのみんなが行くから」

という選択肢が比較的上位にあったことが、心の救いでもあった。それでも、早稲田に行けば多くの「人」がいて、きっと何か大きなものを得られるはずだ、そんな直感を確信的に期待していた。

期待以上だった。学友たちと過ごした日々は視野を広げ、お互いを高め合い、好奇心を刺激し続けてくれた。彼らとの出会いが高い志を持つべきだ、そんなことをあたりまえに思える人間に磨きあげてくれた気がする。

あの頃抱いた「世界に貢献したい」という青臭い理想は、児童書出版という形で結実した。

(ポプラ社代表取締役社長・平17一文)

世界中の子どもたちが同じページで泣き、同じページで笑ってくれたなら、それは戦争のない平和な世界へ一歩近づくはずだと信じている。また近年、日本国内において自ら命を絶つてしまっ小中高生の数が増えている。事実に触れ、心を痛めている。希望や勇気を届けたい、教室の隅で暗い顔をしている子どもの救いになるような本をつくり届けたい、それが私のミッションだと感じている。

「進取の精神」を胸に、これからも出版の世界で挑戦し続けたい。

早稲田の縁



佐藤航

会報への執筆を依頼され、何を書いたものかと学生時代に想いを馳せた。

入学初年度の2002年春は、東京六大学野球が最も印象深い。最終節の早慶戦の勝利で6季ぶりの優勝が決まり、神宮球場を出発点に応援歌を歌い、

呑みながらのパレード。ゴールの文学部キャンパスでは振舞い酒あり、ビールかけに動しんだ。さすが早稲田だな、と感銘を受けた。

早稲田はそこから破竹の4連覇。恵まれた時期に在籍できたと思う。早慶から始まり、最後に東大が加わって成立した東京六大学野球は、今年で100周年を迎えたそうだ。

野球といえは、地元群馬の友人と第二外国語クラスが偶然一緒になった縁から、サークルを設立した。

戸山公園でのキャッチボールに始まり、調子づいてノックもやり出したところ、さすがに響

響を買ったが、忘れられない思い出だ。

当時は早稲田に住んでいて、帰宅すると朝食ははずの釜の飯が空になっていたことがあった。後になり、腹を空かせた後輩の仕業とわかったが、気の置けない仲間たちに恵まれたと思う。

そんな状況なので、学生の自分は存分に置き去りにし、小遣い稼ぎにもよく精を出した。当時は新学生会館の掲示板でアルバイトが募集されていて(今もあるのだろうか)、そこで縁を頂けた出版社での助言が、現在も働く会社を知るきっかけだった。

(日本出版販売 流通計画課課長・平18法)

運良く内定を貰うことはできなかったものの、見切り卒業旅行中に必修科目の不可が判明。半ば入社を諦めたが、先の野球サークルの仲間より遠隔で説得され腹を決めた。周遊途上だったチュニジアのATMでディナールをキャッシング、現地の代理店で航空券を入手し、何とか追試に向かった。

▼2025年の今年、日本は昭和100年・戦後80年を迎えた。筆者は昭和20年1月、満州大連の生まれ。戦後をまるまる生きてきた。今日のトランプに振り回される国際政治、惹起される戦争紛争はロシア・ウクライナ、イスラエル・パレスチナだけではない。世界各地で爆撃合戦つづき果たして今を、戦後といつてよいのかと思う。日本は寸分も戦争に関わっていないと言えらるだろうか。

▼「武装的平和から、真に人道的平和にこれを導いて、この危機をまぬがれる」ということは、目下の四海人類の大急務である。「遠からずして世界は武備のばからしさを覚るに至るべし」。本学創設者・大隈重信が「学報」(1910年)当時・総長に寄せた言説だ。この頃、日本は韓国を併合、欧米列強は植民地拡大を続けた。大隈は学生たちに国際協調・平和な世界を訴えたかったのではなかったか。

▼戦後80年を迎えた校友は1963〜65年入学組だろうか。「不世出のストライカー」——サッカーの釜本邦茂(昭和42商)も、その一人だろう。

早稲田境界

「都の西北、早稲田のトナリ」の出版倉庫



小野信也

私は1987年に、今はなき第二文学部に入学をしました。入学後から4年目までは、昼間は親の住まいの近く・神奈川県逗子市の逗子島森書店で働いたり、教育学部で学生職員をしたりにしていました。

在学5年目が決まったさいに、先に卒業する友人からアルバイトを引き継いだところが、今にいたる勤め先となっていてます。その後6年目のときについて学費が払えなくなり、いったんは学籍を失くすことになりました。そして、そのアルバイト先である白水出版センターに社員として正式に加わることになりました。

当社の在所は、都電早稲田駅のあたりから神田川を渡ったすぐのところになります。そのようなことで、私は大学入学から現在に至るまで38年間、早稲田大学周辺をウロウロしていることになりました。今も毎朝、大隈

講堂前を通って出勤しています。

31歳のときに、未納分の学費と入学金の半分を納め、勤めながらの再入学をして、2000年の3月に第二文学部卒業を果たしました。

早稲田大学に入学したからこそこの縁で入社した当社は、白水社の物流子会社で、簡単に言えば出版倉庫での作業（入出庫管理、書籍改装など）に従事してきました。白水社は今年おかげさまで110周年を迎えましたが、白水出版センターは今年で46年目です。

白水社の営業社員が外向するかたちで設立させた当社におい

て、私は当社生え抜きの社員として勤めながら、出版界の移り変わりを体験してきました。

「自身の経験から得た情報をもとに作業をされていた先輩方から学びつつ、より効率化をはかるために「出版VAN」を導入して、事業を継続できる方法を模索してきました。

多品種小ロットを特性とする専門書をいかに管理しながら読者の皆様のもとへ適正に送るか——いまだき珍しい23区内での出版倉庫という特性を生かした職場で、今後も一冊一冊に生命を吹き込んでいきます。

（白水出版センター代表取締役・平江 元二）

「まなび」に係る価値創出を



讃井裕二

この度出版稲門会に入会させていただきます。よろしくお願ひ申し上げます。

早稲田高等学校、早稲田大学（教育学部英語英文学科、大学院文学研究科）に通い早稲田界隈で9年過ごし、成長期の栄養はメルシーの「ラーダイ」で摂

取してきました。卒業後、丸善株式会社（当時）に入社、現在早稲田大学は図書館をはじめ、お取引先様です。

いざ就職となったときは職業観のようなものが定まらず、好きな本に携われ、また、憧れていた英国ロンドンに出張所があったという浅薄な動機で丸善に入社、洋書の輸入企画の業務からスタートしたのが出版業界との関わりの始まりでした。

それが1996年。この年をピークに出版市場は縮小しはじめ、Amazonが上陸したタイミングでもあり、金融系だった父親から「大丈夫か？」と心配されたことを覚えています。事

実その後の指標等の多くで厳しさが続いています。しかしながら、半ば国力の一翼といつてよいほどのアニメやIPビジネスなどはもとより、教育DXや地方創生など社会が必要とする「まなび」に係る課題解決の核のようなものとして、「本が持つ力」を体感しながら社会貢献を目指す仕事を続けている幸福を、改めて振り返っています。

ロンドン出張所にも勤務し、海外の出版業界に関われたおかげで学んだ出版関係企業の経営戦略や想い、得られた人脈は、その後様々な業務上の役割を果たすうえで貴重な足場になっています。

……などと振り返る間もなく業界のチャレンジは待ったなしで、出版各プレイヤーの皆様と利用顧客、国内外を問わず共創することでもまなびに係る価値を創出することに取り組んでいます。「本」は単なる電子化だけでなくその姿を変えつつありますが、まなびの核心にはやはり象徴的な意味合いでの「本」があると考えています。

毎日顔を合わせている人社以来の同僚や、仲間、取引先にワセダが多いことに今更気づかされます。早稲田の繋がりを、この価値共創の大きな力にもしていきたいと思えます。

（丸善雄松堂執行役員・平6教・平8院）

68年メキシコ五輪では日本の銅メダル獲得に大貢献、なんとアジア人初の得点王に。釜本は世界サッカーのレジェンドになったのだった。国際Aマッチ75得点の日本記録は未だに破られていない。惜しまれることに、釜本は8月に81歳で急逝する。合掌。

▼母校大先輩の井深大（昭8理工）が創業者のソニーグループが寄附講座を基幹理工学部内に設置する。開講は10月。本講座は同学部表現工学科の映像・音響・AI・認知科学などの研究知見を、ソニーのクリエイティブエントテインメント事業の取り組みと融合させて人材育成を図る。さらに表現工学に関する学問領域の創成をめざす。

▼校友の活躍を報告。囲碁・一力遼（令2社）の勢い凄く棋聖・名人・天元・本因坊四冠の保持継続中。在学時ランニングサークルで走っていた小林香菜（令6法）は大阪国際女子マラソンで自己新記録。日本勢トップの2位。彗星のように現れた異色の選手に陸上界が歓喜する。快進撃の東京六大学野球は昨春秋・今春と3連覇で通算49回目の優勝。拍手を打ちましよう。

（團部尚幸・元六耀社ほるお出版社長・昭43法）

之習時而学



赤ちゃんに絵本をひらいたら

25年目を迎えたブックスタート

NPOブックスタート代表

白井 哲

21世紀の始まりと共に、「ブックスタート」が日本にやってきた。この耳慣れない言葉を初めて聞いたのは、日販仕入課の佐藤いづみさんからである。英国バーミンガム市でまったこの読書普及の活動に感動した彼女から、「日本でもぜひ実現策を模索したい」と、熱意あるプレゼンテーションを受けた時のことだった。

地域のすべての赤ちゃんを対象に、絵本をひらく時間をシェアする楽しさを体験してもらおう。その上でプレゼントしてしまおうところが、とてもユニークだった。乳幼児健診の場である地域の保健センターで実施されており、保健師や図書館員などの連携が不可欠だという。話を聞くうちに、この活動にはとても大切な価値が含まれているのではないかと——そんな予感がしたことを覚えている。

「2000年子ども読書年」のために結成された「推進会議」事務局では、さっそく佐藤さんに参画してもらって検討チームをつくり、ヒヤリングを開始した。出版界をはじめ、

小児科医、作家、図書館や母子保健の関係者、地域文庫の主宰者など、多方面からすぐに賛同の声が集まった。これら多様な意見を反映できる推進母体として、NPOの設立を決定するに至った。

読書推進の枠を超え、地域の赤ちゃんともまわりの大人たちのために、出版界は社会貢献に踏み出すことになった。非営利の絵本流通の仕組みを整え、特別な価格と流通で絵本を提供し、実施自治体を経済的に支援した。一方、自治体では行政に加えて、地域住民もボランティアとして参加し、公民の協働が実現した。これは日本のブックスタートの大きな特色となり、世界の実施国からも注目されている。

初年度は36自治体で実施が始まり、現在は1100を超えるまでに、現在では1100を超えるまでに、じわじわと拡大してきた。これまでに800万人以上の赤ちゃんに、絵本とその楽しい体験がプレゼントされてきた。

ブックスタートはとてもシンプルな活動だ。赤ちゃんと一緒に絵本を開く喜びを味わう——そのきっかけ

令和7年度 出版稲門会総会のご案内

記

日時：令和7年11月18日（火）17:30～
（受付17:00～）

会場：リーガロイヤルホテル東京
〒169-8613 東京都新宿区戸塚町1-104-19
TEL：03-5285-1121(代)

式次第：(第1部) 総会 17:30～
(第2部) 講演 18:00～
登壇者：オグマナオト氏
(構成作家/ライター)
テーマ：「早稲田とスポーツ」(仮)
(第3部) 懇親会 19:00～20:30

会費：10,000円（50歳未満は7,000円）

※お差し支えなければ当日、別途年会費（9月1日現在 50歳以上5,000円、50歳未満3,000円）をお預かりいたします。

編集雑記

▼4月から市立図書館に勤務し、また同じ図書館でボランティア活動にも携わっています。出版業界と公立図書館との関係においては課題もあると思いますが、それ以上に日々さまざまな利用者が来館する中で、改めて「図書館は社会教育施設」だと実感しています。「編集雑記」の担当も最後となりました。これまで快く寄稿していただいた皆様に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

（北口克彦・昭56政経）

▼7月31日から娘と二人で万博に行ってきた。37、8度の気温でも海沿いの会場は風が強く、大屋根リングの上も日差しは強いが存外快適に過ごせた。熱中症対策として30分以上待たずに観られるところを日指したが結局、2日間で25か所以上回れ、各国のビルも堪能し満足。最終日に吹田の万博公園に行つたが、こちらのほうが暑くて大変でした。

（富永靖弘・昭59商）

（公式ウェブサイト）

<https://www.bookstart.or.jp>

（昭44政経）